

※脚韻は、下平声麻韻。韻字は「誨・誇・家・迦・花・沙」第十句末の「涯」は、上平声佳韻で、韻を踏んでいない。押韻上の例外の句。

訓読

- ・ 塚中 誼譚を避くること得ず
- ・ 境に遇ひて幽閑自ら誇るに足る
- ・ 秋雨 庭を濕す 潮落つる地
- ・ 暮煙 屋を縈る 潤深き家
- ・ 此の時 傲吏 莊叟を思ふ
- ・ 處に随がひて 空王 尺迦に事ふ
- ・ 病に依り扶持す 藜の舊き杖
- ・ 愁を忘れて吟詠す 菊の残れる花
- ・ 食は月俸に支へられ 恩は極り無し
- ・ 衣は風の寒さに苦しめども分は涯り有り
- ・ 是の身を忘却して偏に意を用ふれば
- ・ 誼が舎の長沙に在りしより優すぐれたり

通釈

・ 町なかでざわめきを避けることは（本来）無理なことである（はずなのに）